

## ロータリークラブに支えられて

34歳のとき、私は、突然、人生の大きな岐路に立たされました。先代社長でもある父が急逝したのです。

覚悟も準備もないまま、会社と社員、そして地域に対する責任が一気に私の肩にのしかかりました。悲しみに向き合う余裕すらなく、「自分に経営者が務まるのか」という不安だけが心を支配していました。

経営の知識も経験も十分とは言えない若輩者でした。自分の判断一つで社員や取引先の人生が左右されるという現実直面し、夜眠れない日々が続きました。そんな不安と孤独の中にあつた私を支えてくれたのが、ロータリークラブの存在でした。

ロータリーの例会や、諸先輩方との語らいの中で、私は経営のノウハウ以上に大切なことを学びました。それは「経営者としてどうあるべきか」という姿勢や心構え、そして人としての在り方でした。挨拶の仕方、言葉の選び方、約束を守ることの重み。どれも当たり前のようにいて、責任ある立場になって初めて、その意味の深さを痛感させられました。

ある先輩ロータリアンは、私にこう語ってくださいました。「職業奉仕とは、立派なことを語るのではなく、日々の仕事を誠実に積み重ねることだ」と。その言葉は、迷いの中にあつた私の心に、静かに、しかし確かに響きました。利益を追う前に信頼を築くこと。会社の成長よりもまず、人を大切にすること。それこそが職業奉仕の原点なのだと、気づかされた瞬間でした。

ロータリーには、叱ってくれる人がいます。励ましてくれる人がいます。そして、黙って背中を見せてくれる人がいます。失敗したとき、立ち止まったとき、「一人ではない」と思えたことが、どれほど心強かったか計り知れません。父を失い、孤独の中にいた私にとって、ロータリーは人生の師と仲間に出会える、かけがえのない場所です。